

くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻 終回

成興寺住職 小倉玄照

概念と現実の遊離

かつての頃は、これほどではなかったと思うのですが、近年は各地で講演会とか研修会とかがしきりに持たれるようになりました。一般住民を対象にしたものもあれば、専門家のためのものもあります。とにかく日本中で毎日、おびただしい数の講演会や研修会が開かれています。私も、時おりそういう講演会の講師として招かれたりもするのですが、そういう場で話を

しながら、このごろは何だかむなししい思いが心をよぎることがあります。

私の話を聴講してくださるのはありがたいことなのですが、はたしてそのことによつてその人の生きざまがどれだけ変化するのだろうか——と思うと、つい懐疑的になってしまうからです。

先日、私の保育園の若い保母さんがある保育園講演会に派遣しました。いつもそうするのですが、その時も、後日、その内容や感想について

文書で報告をさせました。現代の幼児の特質や問題点、保育者が保育を展開して行く上で注意を払わなければならない点などがきちんとメモされて、講演の内容が大体私にも了解できるような報告書となっていました。ところが、講演の内容と自分たちが日常に行っている保育活動との接点³がその報告書にはないのです。講演は講演であって、現実の保育とは無縁なかたちでそれがまとめられているのです。

「私たちの保育している子どものいきいきしている姿は、その先生が問題にされた現代の幼児の一般的傾向、つまり、無気力、無感動、無関心、とは一味違うと思うのですが、その点はどう思いました。」

と、私は尋ねてみました。すると彼女は、首をかしげながら、

「はい、うちの子はみんな元気ですが……。」
と答えて、よくわからない風情です。短大を

卒業してすぐに私どもの保育園に就職した彼女は、他の保育園の子どものことは殆んど知らないのですから「今の子どもは」という一般的な表現でその問題点をことあげされると、いつも一緒に接している子どもたちをみなその範疇で考えてしまうのです。私の感覚からすれば、たとえ他の子どもに殆ど接したことがなくても、話の中でとりあげて語られている子どもの姿をイメージするときには、自分が日常に接している子どもと比較してそのとおりのか、或いは違うのかと考えると思うのですが、彼女たちはどうやらそうではないらしいのです。

私の講演を聴いて下さる人に対してある種のむなしさを覚えることが多いというのも、そのことと関わっています。つまり、例えば子育てについて、現代社会における一般的傾向を私が批判的に語るとき、そうだそうだ、とうなづいてくれているのですが、自分の問題としてう

けとめていてくれるのかどうか今ひとつ釈然としないからです。

大多数の人は、自分の生活や生き方を殆ど問題にすることなく、漠然と世の中一般の傾向を批判しているように思えるのです。それは、抽象化されたことばの世界、つまり概念の世界だけで問題の解決を考えていると申してもよいでしょう。

苦学おこたらざれ

いったいどうしてこのようにことばで築きあげられた概念の世界と、具体的な現実の生活とが遊離してしまう現象が顕著なことになってしまったのでしょうか。

もちろん、道元禅師の時代にもそういう傾向はあったのでしよう。ことばを取得した時から人間は、概念の世界と現実の世界の遊離を大なり小なり味わうよう宿命づけられているのです

からそれは当然のことなのです。

「苦哉くさい、祖道そどう陵夷りやういなり」

と道元禅師は、その傾向を嘆かれます。苦々しいことだ、自然の摂理に添うて生きる現実の生きざまこそが重要であり、それをまっとうなものにするためにこそことばや概念も必要であったはずではないか、ことばだけが一人歩きをするようでは、仏法の実践も地に落ちてしまったのではないか――。

道元禅師は、その原因について、生活が楽になることが大いに影響するという見方をしておられたようです。

「苦学おこたらざれ」

苦しい思いを重ねながら修行を重ねて行く場合には、ことばの世界と現実の行為の世界との分裂は少いと考えられたということでしょう。もつとも、人間は横着が本性ですから「苦学」というのは、あえて厳しい生活環境の中に身を

置かなければ、実行不可能なものだということ
を忘れてはいけません。楽が出来る環境の中で、
意志の力によって苦学を求めるということは、
およそ不可能なことに属するのです。よく「三
日坊主^{かばうず}」と言ったりしますが、これは楽の出来
る環境の中で「苦学」を求めることを揶揄^{やっか}して
いることわざだと申してよいでしょう。

「如何是仏（如何なるかこれ仏）」

という問に対して、

「即心是仏（即ち心これ仏）」

と古人は答えました。しかし、これは注意し
て受けとらなければならぬ答です。厳しい生
活環境の中で、人間の欲望を抑制させられて、
自然の摂理のままに生きている者、つまり「苦
学おこたらざる者」が、「即心是仏」と答えるの
と、安楽な生活の中で気ままに生きている者が
そう答えるのとでは、まったく意味する内容が
異なってくるからです。



生活を喪失した現代人

現代は、科学文明が極度に発達した時代です。それは、快さを求めつづけた成果が実った時代と申してもよいでしょう。人々の生活は、便利で快適なものとなりました。毎日の食事すら自分の手を煩わす必要がない生活を送っている家庭も珍しくなくなりました。

本当は自分の力だけでは何ひとつ出来ないのですが、機械の力や組織の力で大概なことが順調に仕上がって、生活に困ることがないものですから、無意識の内に自分の力を過信してしまいます。森林の中で野性の生活を送っていたら、例えば、下顎が発達せず、歯の噛む力が弱ければ、たちまちに飢え死にをしてしまいます。ところが、たとい歯が全部消えてしまっても、義歯を入れたり、或いは軟らかい食物を調達したりして、そこそこに生きていけるのが現代社会

なのです。

一事が万事その調子ですから、私どもはいつの間にか自分のいのちを生き続けていくための生活の労苦をすっかり忘れてしまいました。生きる原点ともいべき原始的な労働と無縁な生活を送っているのが現代人と申してよいのです。

具体的な生活を消失してしまった私どもはこゝとばによる概念の世界だけでそれを云々するようになってしまったのです。

「如何是仏」

という問に「即心是仏」と答えても、現代人の問題とする「心」は、ずいぶん観念的な傾向が強いのです。ことばだけで「心」を理想化して考えているのですから、現実を生きている心とは遊離してしまうのです。からだどころか離れてしまうといった方がよいかも知れませぬ。

死ぬほどの苦悩を抱いた人が「心」とは何かを考えるとします。生活だけは何の苦勞もなくやっつけていける状態で、日がな一日心を整えることを考えていても埒らちはあきません。

そういう人が、もし一週間の摂せつ心しん会えに坐るとします。朝の三時から夜の九時まで毎日坐禅を続けてごらん下さい。二日目にもなればもう足の痛さに辟へき易えきして、いつの間にか「死ぬほどの苦悩」が忘れられてしまっているのに気づきません。

心とはそういうものです。からだを使つての具体的な生活の背景なしに考える「心」はこれは虚構の「心」と言つてもよいのです。

「即心是仏といふは、たれといふぞと審細に参究すべし」

と道元禪師は仰せになります。観念的に心だけを問題にしていたのでは、いつまで経つてもその答は得られません。

「仙陀婆の築著ちくじやく 礎著そじやく」

が大切なのです。築著の築は、木の棒を手に持つて、まんべんなく土をたたきかためて土台工事をする事。礎著の礎は、「石」と音符「壺（コウ・カツ・カイ）」を組み合わせた会意兼形声文字。容器とふたをこつんと打ち合わす意。著は、助詞です。築著礎著は、つまるところ、師匠と弟子とが厳しい生活環境の中で共に力をぶっつけあい、一緒に汗を流しながら問題解決の努力をすることをいうのでう。

畑を耕す、種子をまく、草を取る、収穫をする、調理する、食べる——私どもが生きていくための原点となるべき行為をすっかり喪失してしまつて、「心」を云々していても「即心是仏」の真意はわからないということでしょう。

現代文明の恩恵を享受している間に私どもは、すっかり勤を喪失してしまいました。若い人たちと一緒に仕事をしていて何となくもどか

しさを覚えるのは、勤を共有していないことが原因のように思えます。マニュアルにしたがって行為をするだけでは、これは機械的であつて人間としてはものたりないものです。話を聴きながら自分の生活や行為を反省する力と、相手の心を読みとる能力とは一連のものだと私は考えています。それは、厳しい生活環境の中で、生きるために、からだに汗して働くことによつて初めてわがものとなるものです。

今、ものあふれる時代に心の貧しさが云々されています。心の豊かさは、相手の心をわがものとして受けとめられる勤を備えることによつて可能となります。

「王索仙陀婆」の巻は、それを王と家臣という縦の従属関係の中で問題にしています。

昔からの叢林の修行も当然、師匠と弟子という縦の従属関係を重視する中で営まれました。弟子として絶対服従する中でこそ「苦学」は可能

であつたし、我ままの通じぬをういう境遇に耐えて修行することによつて、初めて人間関係を円滑に営む「勤」を養うことが出来たのです。

今、あらゆる場で対等の人間関係が重視される民主社会に私どもは生きています。それはそれでまことに結構な世の中だと思ふのですが、平等の原則を皮相に受けとめてしまうと大変なことになってしまいます。そこに潜む陥穽に気がつかないでいると、私どもは心の豊かさに関わる大切なものを見失つてしまうかもしれませ

正法眼蔵王索仙陀婆 了